

## 創立者の中国大学講演と『4つの主義』

高橋 強

皆様こんにちは、文学部の高橋強と申します。日常的には中国の言語、文化、社会を担当させていただいております。

今日はですね、タイトルを見てみてくださいとメインはですね、創立者の「4つの主義」ということです。特に「4つの主義」というのは何なんだろう、これが問題意識です。何となくわかるが、それではどのように説明したらいいのだろうか、これがいつも念頭にあることです。

今日この「中国大学講演」と付けたのは、今年は日本と中国の関係でいえば、大変にめでたく祝うべき年なので、特に中国を選んでみました。国交正常化50周年で、素晴らしい大事な年なのですが、今、日中双方を見ても、そんな雰囲気は少しも感じられない状況です。とても残念な気持ちでいっぱいです。

創立者は中国へ10回、訪問されましたが、そのうち8回は、大学で講演をされています。その中国の大学での講演を探求しながら、創立者はどのような思いで中国との交流を進めて来られたのか。これをひとつ確認したいなと思って、大学講演を選びました。それと同時に、創立者の思想を深めたいという思いで、特に「4つの主義」はそれら大学講演とどのような関係を持っているのかを深めたいと思っています。もっと言えば、中国の大学講演の中で、「4つの主義」がどのように表現されているか、これを今日は皆様とご一緒に研鑽してみたい、これが今日の私の目的です。

創立者は中国の大学では、8回講演をされています。講演のタイトルに注目してみましょう。北京大学80年では「新たな民衆像を求めて」、それから北京大学84年では「平和への王道」。それから、復旦大学では「人間こそ歴史創出の主役」。それから北京大学90年では「教育の道、文化の橋」。それから、マカオ大学では「新しき人類意識を求めて」。それから、中国社会科学院では「二十一世紀と東アジアの文明」。それから、香港中文大学では「『博文約礼』の脈打つ人格主義」。深圳大学では「『人間主義』の限りなき地平」です。このタイトルを見ただけでも、「人間」とか「人格」とか「人類」とか、それから「平和」「教育」「文化」が中心になっていることが分

---

Tsuyoshi Takahashi (創価大学文学部教授)

本稿は創価大学で2022年8月28日に行われた夏季大学講座で筆者が行った講義「創立者池田大作先生の中国大学講演と『4つの主義』」をもとに、加筆修正を施したものである。

かります。即ち「4つの主義」が各大学講演で表現されていることがおわかりになると思います。

次に、この4つの主義の核心的な内容に移りたいと思います。これから中国の大学講演で創立者の「4つの主義」がどのように表現されているか、これを見ていくわけですが、それを見る上で、何か1つ物差しがあったほうが検討しやすいだろうと思ひまして、「4つの主義」の核心的内容は、こういうものではなからうかと考えたものがありますので紹介します。これはあくまでも仮説ですが。

そもそも「4つの主義」は、創立者がいつ言われたか。まずこれを確認します。それは1974年で、第一次訪ソの時に、コスイギン首相を前にして、初めてこの「4つの主義」を述べられました。その時のことが昨年（2021年）の聖教新聞（9月8日付け）で、このように掲載されていました。「平和主義、文化主義、教育主義。その根底は人間主義です。」その次に「これは仏法を、仏法の言葉を使わずに申し上げたのです」、このような言葉も入っていました。ここで、この「4つの主義」の出発点は仏法で、創立者は仏法を使わないで表現していることが分かりました。「主義」という言葉には、その中にももちろん思想が入ります。思想と実践を包括した、という意味でここでは主義という言葉を使いたいと思います。

これも、聖教新聞（2021年2月25日付け）でしたが、そこには「創価の平和・文化・教育の大河は、いよいよ地球民族の融合へ、人類の精神の大地を潤し、価値創造の大海原へ流れ通っていくにちがいない。この仏法の人間主義の大潮流を（略）」とありました。この人間主義を考えると、キーワードとしては、「精神の大地を潤す」ということがひとつ大事だと思います。それから、「価値創造」ということも大事です。この記事は大変に啓発的でした。

それから創立者の思想というのは、やはり創立者の師匠である戸田城聖先生、また戸田先生の師匠である牧口常三郎先生という、この1つの大きな思想の流れの中にありますので、創立者の思想を考えると、牧口先生の価値論と戸田先生の生命論と、そして創立者の中心的な理論である人間革命論を踏まえて考えていかねばならないと思います。

そういう前提で、「人間主義」に関して次のような仮説を考えてみました。「人間主義」とは「全ての生命の絶対的尊厳に立脚し、人間生命（宇宙との関係も含めて）の価値創造を通して、人間と人間、社会、自然との間に新しい価値を創造していく」主義である。「全ての生命の絶対的尊厳に立脚し」、ここでいう「絶対的尊厳」というのは、言葉上の説明でいうと「至上の価値をおく」「等価物をもたない」とか、「なにものも代替することができない」とか、こんなふうの説明できると思います。そして「人間生命の価値創造を通して」、この場合の人間というのは、宇宙との関係も含めて、という意味で使っています。

「人間主義」以外の平和主義、文化主義、教育主義についても、先ほど立てた人間主義の仮説に基づいて立てた仮説がありますが、これは午後の時間に詳しくお話ししますので簡単に見ておいてください。

それでは今から、中国の大学講演の中で人間主義がどのように表現されているのかを見ていきたいです。最初は北京大学80年の講演の中からです。創立者は、吉川幸次郎という中国

文学の研究者が言った中国は「神のいない文明」である、とても興味深い表現ですが、それに賛同されてその表現を引用しています。そしてその根拠として『論語』をあげています。論語は孔子が書いたものではなく、孔子の弟子が書いたものなのです。孔子先生はああ言ったとか、こういう振る舞いをしたとかが書かれています。論語の一節に「怪力乱神を語らず」とあります。即ち孔子先生は怪しい力、秩序のないもの、神、これらを遠ざけた、語らなかったという内容です。ずいぶん早い段階で神と決別しています。

次に創立者が注目しているのは、漢の時代の司馬遷の『史記』という書物です。司馬遷の史記がなければ、秦の始皇帝が何したかとか、その前の歴史がわからない、それくらい重要なものです。司馬遷は、『列伝』の中で次のように言っています。「天道はえこひいきなく常に人民に味方すると言ったけども、本当なんだろうかと。司馬遷はお父さんが歴史を研究して、それを書き留める仕事をしていましたので、それを受け継いでいます。故にそれまで、様々調べる中で、善人が減び悪人が栄える歴史的事実がたくさんあったことを痛感して、司馬遷は次のように言います。「私は、はなはだ思い惑う。いわゆる天道は是なのか非なのか」と。すごいですね。当時、天道というのは、誰も疑ってはならない、非常に権威のある存在なのですが、それに対して、疑問を呈しているのです。是なのか非なのかと。

創立者が注目したのは、司馬遷の疑問は、決して他人からの伝聞ではなくて、自身の個別的知見から出発している点です。故にこの言葉は重い意味があると言っています。この疑問の背景を簡単に紹介します。少し脱線ですが、今日の講座の中で武帝がもう一回また出てきますから留意しておいて下さい。

司馬遷の友人に、李陵という将軍がいました。その将軍が武帝の命を受けて匈奴との戦いに行きました。しかし残念ながら、捕らえられて捕虜になってしまいます。それをめぐって武帝の周りにいる大臣の多くが、李陵は弱腰だったとか、いろいろな讒言を言いました。そのとき司馬遷は、李陵は友人でしたし、また李陵がいかに善人であったかを知っていましたので、かばいました。そのことが、武帝の逆鱗に触れて、司馬遷は宮刑にあってしまいました。司馬遷はこの個別的事件から出発して、ほんとに天道は是なのか非なのか、という疑問を發したのです。

創立者はそこに注目して、またそれを通して、中国には「個別を通して普遍を見る」という伝統があったことを強調しています。「個別を通して普遍を見る」の内容は、仏教用語でいうと「諸法実相」といってもいいかもしれません。個別とは諸法です。それを通して、実相即ち普遍を見るということです。「個別を通して普遍を見る」というのは、ここでは、ヨーロッパのキリスト教文明との対比で、創立者は述べています。ヨーロッパは「普遍を通して個別を見る」、即ちキリスト教を通して、個別を見るという、これはヨーロッパの伝統で特にキリスト教文明の伝統であると述べています。

この「個別を通して普遍を見る」というのは、どのような意義があるのでしょうか。創立者が特に注目したのは、現実や人間に目を向けて、そこから普遍的な法則性を探っていたが、そこには、ものの見方、考え方の原点に常に人間が据えられていた点です。人間が原点である人間観、

世界観が形成されてきた点を強調しています。私はこの講演のここに触れたときに、自身が立てた「人間主義」の「生命の絶対的尊厳に立脚する」に関連するなと思いました。

次は復旦大学の講演です。まずこの中では2つの中国語が出てきました。「温故知新」即ち、古きを訪ねて新しきを知ると、「借古説今」即ち、古きを借りて、今を説くことです。この2つの言葉から、創立者は、中国は歴史を尊び、歴史的経験を鏡や光源として、現在を生き、未来を方向づけてきたと評価しています。そして創立者は、その歴史はある種の教訓性を育みつつ現在に生きていると見ています。

創立者はこの点を更に展開させて、中国の歴史への関心のあり方は、冷たい客観的な法則性を追うのではなくて、人間、いかに生くべきかという激しい主体的、倫理的問いかけを常に持っていた、即ち、中国では、歴史の中に法則性を見出そうとするのではなくて、歴史を通して、人間はいかに生きたらいいのだろうか、ということをつも問いかけてきたと述べています。

この人間いかに生くべきかという点が、大事だと思います。これは価値創造につながるからです。私はここから、自身が立てた仮説の「人間と人間、人間と社会」、この社会のところに歴史を入れれば、「人間と社会の間の価値創造」に関連するなと思いました。

次は中国社会科学院での講演です。そこでの講演には、こういう言葉がありました。「共通のエートス」、エートスとは道徳的気風という意味ですが、難しい言葉ですね。創立者は中国には「我よりも我々を基調に、人間同士が、また人間と自然とが共に生き、支え合いながら、共々に繁栄していこう」という心的傾向」、こういう道徳的気風があったと述べています。私はこの「人間同士が、また人間と自然とが共に生きて、支え合いながら」というのは、これは「人間と人間、人間と社会、自然との間の価値創造」に関連し、それから「共々に繁栄していこう」、これは「人間生命の価値創造」に関連するなと思いました。

次に創立者は、孔子の思索を取り上げています。あの「正名」ということです。孔子はそういう思索をします。「正名」というのは「名を正さんか」ということで、「名」は、これは名称のことです。この「正名」というのは、この名称と実体との、その間の整合性を強く求めていくという態度のことです。例えば、親孝行の孝、「孝」という名称があります。それが、ある親子、これが実体ですが、この親子間に本当に整合性があるのかどうなのか、またそれを強く求めていくということ。これを実施することによって社会はよくなるというのが、孔子の発想なのです。ただ「孝」という価値観を中心に据えると「親孝行をなさい」が出てきますが、子供の面倒を見ない親の場合は、別の価値観が必要になると思います。

創立者は、その「名を正さんか」というこの孔子の思索は、突き詰めて言えば、政治次元の俗人を振り払いながら、精神性の純度を高めて、一切の秩序を構成する原点に迫ろうとしたと、評価しています。即ち、孔子はこれを通して、人間とは何か、どういう存在なのかということ、探求していったのではなからうか、と言っています。私は確かにそうだなと思います。ここで述べている「人間存在そのものへの探求」は、私が立てた仮説の生命存在の形態、即ち「生命の絶対的尊厳性」と関連するなと思いました。

次のところは今回、講座の準備をしていて大きな啓発を受けた内容です。これは皆様にとっても有意義な内容になると思います。創立者は、古来その名に値する宗教とか哲学とかは、2つの世界観を持っていた、と言っています。1つは「人間いかに生くべきか」という価値論の側面と、それから「世界はいかに構成されているか」、これは生命も含めると「生命はどういう存在なのか」という存在論の側面を併せ持った包括的な世界観であったと。なるほどと思いました。今後、様々な主義を見ていくときも、この主義の価値論は何か、存在論は何か、といつも考えるようにしたいと思います。

そこで、今こんなことを思ったのですが、牧口先生の思想や哲学は、存在論や価値論でいうとどのような側面を持っているのかなど。そう考えてみたら、「郷土民、国民、世界民」、これは『人生地理学』の中に書いてありますが、あれは存在論だだと思います。一個の人間は同時に、郷土民、国民、世界民という3つのアイデンティティを持たねばならないと言っているのですが、また一方で人間の存在というのはそういうものであるとも言っています。それから、美・利・善の価値創造は、これはまさに価値論です。牧口先生の思想には、存在論と価値論がセットで準備されていました。それから、人間革命思想を考えると、一念三千論は、これを存在論として考えていいなと思います。それに対して十界論とか十如是論は、これは価値論というふうに考えれば、これはもう2つの側面を持っていることになります。

次は中国の思想を支えている儒教道徳、儒教的な価値観についてです。あの広い中国に生きている人たちを支えている道徳を考える時、やはり儒教の影響が大変に大きいです。もちろん道教の影響も強いです。そしてその儒教いわゆる儒家の価値論というのは非常に豊富です。子どもは親に対してこうこうしなければならないとか、家臣は主人に対してこうこうしなければならないとか。こういったその価値論の側面が、非常に豊かだと思います。それに比べると儒家が持っている存在論は極めて貧困というのが通説であると述べています。通説だと言っているのです、たぶんこれは創立者だけの見解ではないと思います。大変に興味深いです。

先ほど紹介しました「正名」との関連で言うと、孔子も「名を正さんか」というこの思索の過程で、人間というのはどういう存在なのかということを探求していたと思います。その後、儒教は次第に仏教の影響を受けながら、宋の時代には存在論を形成していったと言われています。

ここで、またこんなことを考えました。それでは仏法の人間に関する存在論というのは何だろうと。生命の次元からの把握ということからすると、人間生命の小宇宙と宇宙生命である大宇宙の一致とか、小我と大我の一致とか、諸法即実相とかが浮かんできました。更に空仮中の三諦とか、九識論とか、一念三千論とかは、仏法の人間に関する存在論として考えていだろうと思っています。それから価値論ということかというと、十界論とか、十如是論とか、九識論とかがあげられると思います。九識論は両方に入っていますが、存在論から価値論への展開が大いに見られる価値論ではないかと思っています。そういう意味では、価値論を構成する上で仏法の有用性というのは、強調してよい点だと思っています。

この辺りの話は、創立者とトインビー博士との対談集『二十一世紀への対話』の「仏法的な見

方」の所に三諦論、十界論、十如是論が書いてありますので、そこをじっくり読んでみて下さい。

先ほど儒家が持っている存在論は極めて貧困であると言いましたが、創立者は講演の中で、その儒家が多く語らなかった存在論に対して、1つの補充的な意味として、仏法の存在論と価値論のその核心的な部分を紹介しました。創立者が紹介した内容は、天台智顛の『法華玄義』のこの部分です。創立者の意図としては、儒家に不足しているといわれている存在論を、この法華玄義をもとにして補充し補足したら、どうでしょうかという発想ではないかと思っています。

『法華玄義』はこのように言っています。「妙法の至理には、もともと名はなかったが、聖人がこの理を観じて、万物に名をつけるとき、因果俱時の不思議な一法があり、これを名付けて妙法蓮華と称したのである」と。「これを名付けて」、この部分はすごいと思います。名をつくっています。孔子とは違います。孔子は名を正しました。仏法は名をつくるほうで、儒教は名を正すほうです。

『法華玄義』は続けてこのように言っています。「この妙法蓮華の一法に、十界三千の一切法を具足して、一法も欠けるところがない。よってこの妙法蓮華を修行する者は、仏になる因行と果徳を同時に得るのである」と。この中の「妙法蓮華の一法に十界三千の一切法を具足している」のところは、これは生命の存在論と考えていいと思います。それから「仏になる因行と果徳を同時に得る」のところは、創立者は、人間はいかに生くべきかの機軸となる修行論、価値論だと述べています。

この部分から考えられることは、儒教にとって『法華玄義』の存在論は儒教の価値論を更に豊かにする上で、大変に参考になるのではないかということです。また『法華玄義』の価値論の中に、私が立てた人間主義の仮説の「人間生命の価値創造」とか、「人間と人間、社会、自然との間の価値創造」とかが、十分に含まれていると思いました。

次は香港中文大学での講演です。創立者は「中庸」を取り上げております。この中庸の内容は、儒教が持っているこの価値論の豊饒さを十分に表していると思います。儒教は中庸を次のように言っています。「喜怒哀楽の未だ発せざる、之を中と謂う。発して皆な節に中る、之を和と謂う」と。喜怒哀楽が発していない、その状態を「中」というとありますが、喜怒哀楽を抑えることはなかなか難しいです。また更に発しても、いい具合に節度を保ち、いい具合に調和がとれているのを「和」というとありますが、本当に難しいです。しかし儒家はそこまで要求をしています。

それではなぜ要求したのでしょうか。それは偏ったイデオロギーとか、狂信とか妄信につけこませないために、「中庸」を目標にしたのです。喜怒哀楽となって現れる前の、偏らない心、心の平静を保つことができれば、偏ったイデオロギー、狂信、妄信、そういうものが入り込む余地はなくなるだろうと言っています。このところは、「人間生命の価値創造」と関連すると思っています。

他方、孔子もこの中庸がいかに難しいかということを知っていました。以下のように言っています。「天下国家を均（おさ）むべきなり。爵禄をも辞すべきなり。白刃をも踏むべきなり。中庸は能くすべからざるなり」と。即ち、治国平天下よりも、高位高官を辞退することよりも、白刃を素足で踏みわたることよりも、中庸の実践は難しいということです。

それではどうしたらいいのでしょうか。創立者はこの問いに対して次のように言っています。「あらゆる精神力を奮い起こして、研ぎ澄まされた最高度の緊張をもって、現実に対応しながら正しい判断を、選択をなしていく。その中ののみ、中庸は成立するでしょう」と。即ち、あらゆる精神力を奮い起こして、研ぎ澄まされた最高度の緊張感をもって、現実、人と人との対応、人と社会との対応、人と自然との対応をしながら、正しい判断、選択をしていくことにより、「中庸」に到達することができのではなからうか、ということです。

そこで思ったのですが、創立者が述べたこの部分「あらゆる精神力を奮い起こして、研ぎ澄まされた最高度の緊張をもって」は、「人間生命の価値創造」に関連し、更にこの部分「現実に対応しながら正しい判断を、選択をなしていく」は、「人間と人間・社会・自然との間の新しい価値創造」に関連するなど。

創立者はここから、「中庸」にはあらゆる社会変革に先だって、人間の内面的変革を第一とする人格主義という、そういう理想主義を見ることが出来ると言っています。そしてそれを実現する為に、人間関係のバランスのとり方とかいう、そういう表面的なものではなくて、その背景には、汝自身の自覚に立った自己規律、自己修養の必要性も包括されていたと述べています。創立者は更にこういった作業の中に、すべてのものを人間という回路を通して行なって検証してきた中国的人間主義の優れた革新的な性格を見ることが出来ると高く評価しています。

この中国的人間主義の内容を、私が提示した「人間主義」の仮説に当てはめて、言葉を少し変えてみると、人間生命の尊厳性という回路を通して、人間を座標軸にして検証あるいは価値創造していく、と言うことが出来ると思います。またこの内容は、まさに「人間と人間、社会、自然との間の価値創造」に関連すると思いました。

次は深圳大学の講演に移ります。この講演では、創立者は中国思想の最大のキーワードは、「人」というこの漢字で、この漢字には人間と人間の相互依存が表現されていると言っています。それから次の「仁」にも注目して、「仁」は「人」と「二」からできていて、人が互いに向き合い、意を通じ合い、愛し合うことから出発すると述べています。この漢字に注目をして、人間主義を考えて見ると、「人間と人間の間の価値創造」とか、「人間生命の価値創造」に関連するなと思いました。

次に創立者は、このような中国の伝統的な人間観・自然観は、宋の時代の朱子学に体现されていると捉えて、その体现された内容を次のように述べています。即ち、「人間は互いにつながりあって、一個の有機体を形成している。そのつながりは、人間の世界、それから自然界、宇宙へと広がって行って、万物が渾然一体となった有機的全体像を構成している」と。

ここからは一念三千論のことを想起しました。人間は互いにつながりあって一個の有機体を形成している。そして社会や自然、最終的には宇宙まで広がって行って、万物が渾然一体となった有機体、有機的全体像を構成している、これはまさに縁起論です。この内容から、宋代の朱子学はやはり仏教の影響を、特に一念三千論の影響を受けて、その存在論が形成されたのではないだろうかと思っています。この点に関して創立者も、ここには人間や事物の個別観よりも、関係性、

相互依存性を重んずる、仏教の縁起論がその通底、背景に流れていると言っています。

私が更に興味深かった内容は、次の「等身大の思考方法」です。創立者は、先ほど述べた人間を含めた万物が渾然一体となった有機的全体像という見方の中に、人間主義に基づく等身大の思考方法が見出せると述べています。そしてその有機的人間観においては、森羅万象ことごとく人間に無関係なものではなく、すべては「人間いかに生くべきか」との問いに即して、位置を与えられていると言っています。

今、皆様の周りにいろんな人がいらっしゃいます。様々な自然があります。それは、自分自身に対して「いかに生くべきか」という問いを発するために、位置を与えられているということです。この世の中には、すぐ話が合う人もいます。合わない人もいます。最後まで合わない人もいます。関係性がどうであれ、私自身に「いかに生くべきか」という問いを発する為に、その人は存在していると言っています。この等身大の思考、思考方法というのが、今回特に印象的でした。この内容は、「人間生命の価値創造」、それから「人間と人間、人間と社会、人間と自然との間の新しい価値創造」と関連しているなと思いました。

創立者は以上の内容を総括して次のように言っています。「人間のための科学、人間のための政治・経済・イデオロギーというように、全部、人間のために、常に人間という原点に立ち返って、等身大の寸法に合わせて、あらゆる事象の意味、善悪、過不足が検証されていく立場、こうした人間主義は、東洋的発想全般で、中国思想はその典型だ」と。

ここに人間主義が出てきました。即ち、常に人間という原点に立ち返って、等身大の思考方法に基づいて、あらゆる事象の意味とか善悪とか過不足を検証していくということ。これが人間主義なんだと。ここには、存在論も価値論も両方入っています。等身大の思考方法が有している有機的人間観では、「森羅万象ことごとく人間に無関係なものはない」と「すべては『人間いかに生くべきか』との問いに即して、位置を与えられている」重要な存在論だと思えます。

ここで私の立てた「人間主義」の仮説との関係性を考えてみると、「常に人間という原点に立ち返る」は「すべての生命の絶対的尊厳性」に関連し、それから「等身大の寸法に合わせて、あらゆる事象の意味・善悪・過不足を検証する」は「人間生命の価値創造」、「人間と人間・社会・自然との間の新しい価値創造」と関連するなと思いました。それから出発点が「すべての生命の絶対的尊厳性」に立っていますので、ここにおける価値創造は調和のとれた価値創造が可能になると思えます。

それではここで午前中のまとめをしましょう。

創立者の中国の大学講演の内容を、私が立てた「人間主義」の仮説を基に見てきました。

人間が一切の秩序を構成する原点であるという人間観、世界観は、確かに人間主義とっていいと思います。それから価値論の側面から言うと、人間の内面的変革を第一義とする人格主義がありました。これも人間主義とっていいと思います。それから中庸のところでも触れた「喜怒哀楽の未だ発せざる、発してみな節にあたる」、これも人間主義とっていいと思います。

更に「汝自身の自覚に立った自己規律・自己修養の発現」も人間主義とっていいと思います。



内容的にはよく似ていて表現は少し違いますが、「自己認識・自己理解を第一義とした内省的個人の自立性」も人間主義と言っていいと思います。また「我よりも我々を基調に、人間同士が、また人間と自然とが共に生き、支え合いながら、共に繁栄していこうという心的傾向」、これも人間主義と言ってもいいと思います。それから「人が互いに向き合い、意を通じ合い、愛し合うこと」、これも人間主義と言っていいと思います。

次に、存在論から見てみると、先ほど強調した「等身大の思考方法」が大切です。人間は互いにつながりあって、一個の有機体を成し、そのつながりは、人間の世界にとどまらず、自然界や宇宙へと広がり、万物が渾然一体となった有機的全体像を構成していて、更にそこにおいては、森羅万象ことごとく人間に無関係なものはなく、すべて、「人間いかに生くべきか」との問いに即して、位置を与えられているという内容です。

ここにおいては、存在論と価値論が一体化されているなと思いました。まず人間はこういう位置づけにあって、そしてその位置づけには「人間いかに生くべきか」という問いがいつも発せられている。その問いを聞いて、自分はこう生きていけばいいんだと感じ行動する、これは価値論です。そう考えたら、この部分はさらに広げて「依正不二」が、ここに反映されているといてもいいのではないかと思います。これは今後の課題です。今日、冒頭に紹介しましたが、創立者は「4つの主義」は仏法で、仏法の言葉を使わないで表現したと、ありました。ここなんかはまさに、それに該当する内容かなと思います。

このような「等身大の思考」で捉える、この発想は復旦大のところで説明しました「歴史と人間との関係」のところにも表れていました。中国では、歴史への関わり合い方は、いつも「人間いかに生くべきか」という問いかけをしてきたと強調していました。従ってここにおいては存在論と価値論が一体化されています。

それから、これは先ほど触れませんでした。儒教の中に「仁義礼智信」という「五常」があります。その中に礼、礼儀、礼節があります。礼というのは1つの社会の約束事です。儒教社会ではいつも、この礼という場所が設定されていて、この場所で他人と関わることが正しい生き方であるという道徳がありました。創立者はここに注目して、その礼という場所を通して、人間および社会がどうあるべきかということについて、人間は責任をもってきたとも言っています。創立者のこの捉え方からすると、「礼と人間との関係性」も等身大の思考で捉えると、存在論と価値論が一体化されていると考えていいと思います。

今回紹介した大学講演の中で、創立者が、これが中国の人間主義だと、これが人間主義だと言ったところがあります。そこを再度確認します。まず中国の人間主義のところでは。

一切を人間という回路を通して、あらゆる精神力を奮い起こして、研ぎ澄まされた最高度の緊張をもって、現実に対応しながら、正しい判断を、また選択をしていく。これが中国の人間主義であると言っています。次は、人間主義です。常に人間という原点に立ち返って、等身大の寸法に合わせて、あらゆる事象の意味、善悪、過不足を検証していく立場、これが人間主義であると言っています。

この2つを存在論と価値論の側面から見ると、前者は価値論の内容が中心である一方、後者には「等身大の思考」が包括されているので存在論と価値論が一体化されているように思います。「中国的」が付されているかいないかの差異は、このようにも考えられると思います。

時間がなくなって来ました。私が立てた人間主義の仮説を再度振り返ってみますと、「すべての生命の絶対的尊厳に立脚し」、この場合のすべての生命というのは人間の生命だけではないという意味で、更にはこれに立脚して「宇宙との関係も含めての人間生命」、これらは存在論とっていいと思います。そして「人間生命の価値創造」、この価値論を通して、「人間と人間、人間と社会、人間と自然との間に新しい価値を創造していく」、以上の仮説には存在論と価値論が両方この中に入っていると思います。

中国の大学講演は、どちらかという、それらが強調していたのは「人間と人間、人間と社会、人間と自然との間に新しい価値を創造していく」ではなかったかと思えます。「人間生命の価値創造」、この部分は今日、午後お話しをします「教育主義」のところと大きく関連するというふうに思っています。

それでは午前中のお話しは以上となります。

それでは午後の部に入りたいと思います。午前中のおさらいということ、むしろ大切なと思っている一つは存在論、価値論ということです。例えば「冬は必ず春となる」、これある意味では存在論です。気候や天候の運行からいえば、冬は必ず春となりますから。だから、どうすべきなんでしょうか。何々すべきということになると価値論になります。そう考えたら言葉は存在論とか価値論とか難しそうですが、少し応用して考えると理解しやすいのではないかと思います。

午後は、「平和主義」それから「文化主義」、「教育主義」と、この順番で話していきます。勿論これらもあくまで仮説です。

それでは最初は「平和主義」です。皆様は平和主義とお聞きになると、どんなことをイメージされますか。私は以下にあげます6つの内容が「平和主義」の核心的な内容ではないかなと思っています。1番目は「原水爆禁止宣言」で、これは出発点だろうと思います。ここにおいては生存の権利ということが中心になると思います。2番目は「人間生命の変革」。3番目は「民衆のエンパワーメント」で、このエンパワーメントの意味は、無限の可能性を最大限に引き出す、ということです。具体的には民衆のエンパワーメント運動ということです。4番目は「対話主義」。5番目は「民間交流の促進」。6番目は「自然との共存」です。以上の「平和主義」に関して、中国の大学講演で何点か触れられていたと思います。なお存在論、価値論の側面という、平和主義の内容は価値論のほうがやや多いかなと思います。

最初は北京大学84年の講演です。このような見出しがありました。「どうコントロールする国家の自己抑制力」。すなわち、創立者は自己抑制力というここに注目をして、それを向上させることが重要だと言っています。そしてそれが平和につながっていくということだと思えます。中国ではこれまで伝統的に、それを可能にすることはできたと捉えています。ここでは国家の自己

抑制力と書いてありますが、一個人の自己抑制力と考えてもいいと思います。国といっても、やはり国民一人ひとりから成り立っているわけですから。国家の自己抑制力はすなわち、そこに住んでいる一人ひとりの人間の自己抑制力であると、こういうように捉えたほうがいいと思います。

それでは、なぜそれが可能であったのか。創立者はその背景として、物の見方や考え方の原点に人間が存在していたことを取り上げています。例えば中国哲学は、人生の目的を追求し人間という関心領域からずっと外れなかった、離れてこなかったという人間学であったのだと言っています。即ち人間という座標軸或いは基軸を持ち続けてきたと捉えています。私はこの内容は、午前中からの延長線でいえば、人間主義の①「生命の絶対的尊厳性に立脚」と関連していると思います。

それから、次は戦争との関連です。今日においても戦争は続いています。近代以降、世界は第一次世界大戦、第二次世界大戦等、戦争というのが本当に絶えていませんが、その戦争を支えたものは何か。その1つに植民地主義があると、創立者は捉えています。その植民地主義をよく見てみたら、西洋近代を唯一の基準として人間社会を文明・未開に分ける二元論が背景にあって、この二元論に立つと、どちらかが優秀で、どちらかが劣っているという、このような誤った選民意識が生じていると言っています。

創立者は、このような選民意識は、結論的にいうと、それは人間という機軸を欠落させた思考形態であると捉えています。故に、すべての思想は人間という座標軸或いは基軸を持たねばならないということだと思えます。人間という座標軸を持つことが平和主義で、また出発点だと思えます。これも人間主義の①「生命の絶対的尊厳性に立脚」と関連するように思えます。

次に創立者は平和行動主義を提唱しています。即ち平和というのは行動が伴わなければ実現できないのだと言っています。その例として魯迅の作品の中の『非攻』を取り上げています。この小説の内容は、具体的にいうと、墨子という人の平和行動主義が書いてあります。墨子の思想は大変に興味深いです。墨子も儒家の流れの中の人です。

以下内容を少し紹介します。墨子があるときに大国の楚の国が小国の宋の国に侵攻しようとしていることを聞きつけるんです。墨子が考えるに、宋の国は経済的にも領土的にも、取るに足らないような小さな国なのに、なぜ大国の楚が攻めるのだと。おかしいことだと。これを話しながら、今脳裏には、ロシアによるウクライナ侵攻が浮かんでいました。

そこで、その墨子が更に聞きつけたのは、自分の同郷の公輸盤という者が、どうも雲梯という武器を作って楚の王様に献上し、それが発端になっているようだと。そこで公輸盤に会いに行くと、これを何とかやめさせなさいと言ったら、公輸盤はその雲梯という武器を王様に献上してしまったので、自分ではどうすることもできないと言うのです。そこで、墨子は公輸盤を通して、なんとか楚王に会うのです。楚王に会って言います、何のために宋の国を攻めるのですか、それは思いとどまるべきで、それはどんな利益もないでしょうと。それに対する楚王の答えが面白いのです。自分のために雲梯を作ってくれたので、それを使って攻めないわけにはいかないのだと。こう言うんです。面白いですね。

そこで、墨子は図上戦術といって紙の上に、これから楚が攻めようとしている宋の城の模型と雲梯の武器の模型を作らせた上で、たとえ雲梯で攻めても、この宋の城の中で、このような準備をすればこの雲梯の効力はあまりなく、結局、楚はこの戦いに勝てないというようなことを、図上戦術でやり取りして、その愚かさを問いました。その場において図上戦術に負けた公輸盤は怒って、墨子を殺そうとしたときに、墨子はこう言うのです、宋の城には私の300人の弟子がいて、雲梯を使って攻めてきても、それをやり返すだけの準備ができています、と言ったら、楚王は攻めるのをやめたというのです。

創立者は、墨子のこのような平和のために動き語る「動」の触発作業が重要だと言っていると思います。楚王のところへ直接乗り込んで行って、語って、そしていかに愚かな戦争であるかについて図上戦術でもって示した触発作業です。そのことによって、不信とか憎悪とか恐怖を、信頼とか愛とか友情に変えていく。これこそが平和への王道であると強調しています。このことによって、心と心を開きゆく回路を見出すことができるとも言っています。これもある意味では、平和主義の一つの内容だと思っています。

この2年半、3年になりますが、世界全体はあの新型コロナウイルスの影響でコミュニケーションが非常に取れていません。だからある意味では今、不信と憎悪と恐怖が渦巻いているように思います。こういうときだからこそ、平和のために動いて語る「動」の触発作業が本当に必要とされている、ということが、今回中国大学講義を読んでよくわかりました。

この内容は、平和主義の4番目の「対話主義」と関連するのではないかと思います。創立者は、対話についてこのように言っています。即ち、新たな対話への出発で、また友情の輪を広げる第一歩。そして、対立から協調への軌道はそこにおいて、形成することができる。まさに対話から協調へ、これが価値創造するということだと思っています。

次は、北京大90年の講演でしたが、こういうところがありました。永遠なる友好交流を支えるには、民衆と民衆を結ぶ心の絆、これが大事であると。創立者はここに注目しています。民衆と民衆を結ぶ心の絆、即ち民衆次元の信頼関係を欠いてしまうと、政治・経済上のいかなる結びつきも、砂上の楼閣になってしまう。この点を、創立者は一貫して言われています。その民衆と民衆の心の絆というのは、確かに「絆」は目に見えないです。しかし見えないがゆえに、強いのだと、創立者は言っています。この点は、非常に示唆的だと思います。そして、無形であるがゆえに、普遍的で、恒久的な紐帯になっていくのだとも言っています。

次の内容は平和主義の5番目の「民間交流の促進」、これと関連するなと思いました。創立者は民衆交流に対して、教育・文化がどのような貢献をしていくかということ、さらに展開して、教育交流は平等性と共感をもたらし、文化交流は永遠性と普遍性をもたらしってくれると言っています。またそれを期待して、民衆交流、それから教育交流、文化交流を、これワンセットのものとして捉えています。もっと大きくいえば、平和主義と教育主義と文化主義は相互に関連しているので、立体的に考えていきたいと思います。と主張していると思います。

次は「文化主義」に入りたいと思います。これも仮説です。私が考えたのは次の6つです。1番目は「人間生命の具体的開花」。2番目は「人間を結ぶ力」。3番目は「生きる力、徳の力」。4番目は「永続的平和の創造」。5番目は「新たな価値創造」。6番目は「文化対話主義」です。価値論とか存在論の側面でいうと、価値論の内容のほうが多いなというように思います。

最初は北京大学84年の講演です。中国では尚武よりも尚文が主流で、文化や文明の力によって「武」を自己抑制していくことができたということです。少し難しい言葉の尚武と尚文ですが、前者を「武をとうとぶ」、後者を「文をとうとぶ」と読みます。中国の歴史を振り返ってみると、尚武の時代があったかもしれませんが、しかしトータルしたら、尚文「文をとうとぶ」のほうが主流だった点に、創立者は注目しています。

文、文化とか文明を尊ぶ、そのことで武を自己抑制することができたと強調し、その例として、創立者は唐の時代をあげています。唐王朝は400年くらい続きました。私は唐の時代と聞くと、文化が花開いたというイメージが強いです。このことは中国の友人に聞いても同じです。日本は、その唐の時代に都である長安を目指して遣唐使を送りました。それは日本だけではありません。唐王朝の周辺国家も同様です。日本を含め周辺の国が、唐の文化がどれだけ高いかということを知り、学びに行きました。

創立者は、その時代、文化や文明の水準が非常に高かったので、外征即ち外に対して力を行使して領土を求めて拡大していくことは、非道かつ不道徳という考え方が、大きく花開いたと言っています。その考え方が、杜甫の詩の『兵車行』に反映されているということで、創立者は、この講演の中で『兵車行』を引用しています。この『兵車行』については、後で触れたいと思います。

私はこの点は、文化主義の4番目の「永続的平和の創造」に関連するなと思いました。ここで「永続的平和」という言葉を使いましたが、なぜ永続的平和かといいますと、それは、創立者の文化に対する捉え方から来ていると思います。創立者の文化に対する表現は様々あります。その中で次のように言っているのがありました。文化というのは主体性・調和性・主体性・創造性を骨格とした人間生命の産物であると、このように捉えています。非常に広い捉え方です。であるがゆえに、無秩序・抑圧・破壊を性格とした「武」に対抗できるのであると言っています。たしかに、調和性の反対は、ある意味では無秩序です。主体性の反対は抑圧です。創造の反対は破壊です。人間の生命の中に、調和性・主体性・創造性をしっかり築く、そのことによって武に対抗できるんだと言っています。これは今日、午前中に話した人間主義の②「人間生命の価値創造」と関連するなと思います。

次に杜甫が作った『兵車行』という詩を簡単に紹介します。力でもって外に向かって領土を拡大していくということは、それは非道であり、不道徳であるというのが少しでも感じられたらいいですね。

車は轟き、馬はいもなく。

出兵兵士の腰に弓と矢。

(略)

ある者は15歳から北方、黄河を守り、  
ある者は40歳になっても西方で屯田兵となる。  
出兵するとき、村長が頭を黒い布で包んでくれた。  
帰ってくれば、白髪でまた辺境を守る。  
遠い国境地帯、流血はおびただしく、海となるも、  
漢の武帝は国土を拓げる気持ちを今でも捨てない。  
聞いているだろう、漢の山東地方の200州は、  
どこも荒れ果てて、荒れ果て、茨が茂る。

この後、ずっとこれが続きます。15歳から40歳まで、兵役についているんですよ。なんと長い時間なのでしょうか。村長が、出兵兵士に対して頭を黒い布で包んでくれる。これは当時の成人の儀式で、15歳になると成人の儀式として、黒い布で頭を包んだそうです。帰ってきたら白髪になっていました。そしてまた辺境に追いやられる。非道です。不道德です。それから、遠い国境地帯では、流血はおびただしく、海のようになっている。それでも漢の武帝は、国土を拓げる気持ちを今でも捨てないというのです。

ここで武帝に注目して下さい。今日午前中に武帝が1回出てきましたが、ここにも出てきました。皆様も気が付かれたと思いますが、杜甫は唐の時代の人なのに、なぜ漢の武帝をここで出してきているのか。杜甫は、自身が生きた唐の時代の皇帝がやっていることに対して批判をするためにこの詩を作ったのに、なぜ。杜甫は非常に巧妙です。当時は唐の玄宗皇帝の時代で、もし玄宗の名前を出すと逮捕されてしまいます。だからそれを免れるために、漢の武帝という名前を出したのです。

ここでロシアによるウクライナ侵攻が想起されました。「漢の武帝は、国土を拓げる気持ちを今でも捨てない」の漢の武帝のところロシアの指導者の名前を入れれば、「彼は国土を拓げる気持ちを今でも捨てない」となります。人類はまた同じことを繰り返しているなと思います。そして「聞いているだろう、漢の山東地方の200州は」は、ここでは漢とっていますが、唐のことで「どこも荒れ果て茨が茂る」と。ここもウクライナを思えば、あの広大な土地には穀倉地帯に茨が茂っているということになります。唐の時代の7世紀、8世紀の詩が今日においても、なるほどなと思って読むことが出来るというのは、人間の宿命というか、そのようなものを感じてしまいます。

漢詩はなかなか読み応えがありますね。また様々なジャンルがあります。恋愛のもありますから興味があれば、読んでみて下さい。楽しいです。今年は日中国交正常化50周年ですから、なるべく中国の文化を紹介したいなと思っています。

次はこれも、北京大学84年の講演でした。中国は文明・文化により、周辺国を心服させてきた、或いは周辺国が心服してきたということなのですが、ここでは創立者は、周辺国を心服させるよ

うな文化の力に注目しています。具体的にどんなことを言っているかということですが、その前に心服という言葉を明らかにしておきたいと思います。辞書を引いてみると、心服というのは「心から尊敬して、従うこと」とありました。無理やり尊敬させるのではないのです。従ってここでは、自身が持っている文化とか文明を、相手が尊敬して従ってくれる、これを心服と考えたいと思います。この内容は、実は牧口常三郎先生も同様のことを言っています。牧口先生は「人道主義」のところで、文化によって周囲を心服させることが重要だと。文化を通して従ってもらえるようにするのだと主張しています。

次に、どんな具体的な例があるのかに移りたいと思います。創立者は朝貢外交とか、朝貢貿易にそれが表現されていると言っています。日本も中国に朝貢していました。一番顕著だったのは、室町時代です。足利義満の頃です。それから琉球王国は中国と朝貢よりはもう少し進んだ冊封関係を結んでいました。どのように構築するかですが、中国の周辺の国が使節団を派遣して、中国の皇帝に貢物を献上することにより、皇帝としての地位を認めることを表明して、中国の皇帝は使節団を派遣した王をその国の王として認めて、外交関係や貿易関係を結ぶ、こういうやり方です。だから一切、武力を使わないのです。平和的なやり方です。これはなぜできたかという、それは中国の文化がそれだけ高かったことが考えられます。

朝貢の典型が、私は琉球だと思います。琉球はそれを長くやっていました。だから琉球は小さい島ですが、琉球には沢山の中国文化が蓄積されています。琉球の食文化もすごいなと思っていますが、音楽文化もそうです。琉球は大きな価値創造を成し遂げたと思います。

昨日、テレビを見ていたらある沖縄の歌が流れていました。それは「ていんさぐぬ花」です。あれはいいですね。それからもっと面白いなと思ったのは教訓があの中に入っていることです。沖縄の教訓を閉じ込めた教訓歌、三大教訓歌のひとつらしいのです。それではどのような教訓が入っているのか。親と子供の関係とか、それから、周囲の村の人との関係とか、そういった教訓がいっぱい入っているのです。

そこでふと想起したことがあります。あの内容は、中国の道徳書の内容に非常に似ています。まだ私、解明はしてないんですが、昨日テレビを見ていて、ひらめきました。これは論文に書けるのではないかと。それくらい中国の道徳が琉球に伝来して、それに根ざして、人々の人間関係とか親子関係に、新しい価値を創造しているのです。その教訓歌の中から、この内容は中国の儒教の、道教の、仏教のあの辺りの内容ではないだろうか、そういう研究をやってみようかなと思っています。文化交流の力はとても大きいです。

そして、創立者はさらに深めて、そういった中国の文化・文明の美質即ち美しい特色は何かについて、このように言っています。「相手に礼節を示し、相手から礼節でもって遇せられたい」と。これを中国の文明の美質だと言っています。この内容はどこかで聞いたことがありませんか。「鏡を目の前にして、鏡にお礼したら、鏡の中の自分が自分にお礼してくれた」と言った一節です。このようにして中国は文明の力によって、自制力・抑制力が働いてきたことが分かると思います。私はこのところに触れて、これは徳の力ではないかと思いました。これは先ほど文化主義の3番

目にあげましたが「生きる力」と「徳の力」の後者に当たると思います。「相手に礼節を示して、相手から礼節をもって遇せられたい」。まさに徳ですね。こういうことができるというのは。だから、文化・文明には徳の力があるというのは確かにそうだなと思います。それから人間主義の②「人間生命の価値創造」とも関連するなと思います。

文化の力に関して、これまで創立者は、人間と人間を「結ぶ力」を特に強調されてきたように思います。しかし文化が持っている「生きる力」とか「徳の力」については、あまり聞かないので、すこし探究してみたいと思います。創立者はこのように言っています。まず「生きる力」に関しては、ここでは文化を芸術という言葉に置き換えています。「芸術の力は人を感動、あるいは歓喜させて、その感動は生きる力となる」と。これは確かにそうだなと思います。次は「徳の力」です。ここでは、文化、特に音楽をあげていますが「音楽の力は生きる勇気、平和の祈り、人間の誇りを呼び覚まし、徳の力となる」と。確かに、芸術とか音楽とか、そういう力はやはりあります。確かにこのように考えれば、文化が持っている力は「結ぶ力」だけではなくて、「生きる力」とか「徳の力」とか、ここまで広げることができると思います。

そこでなのですが、それではどうして、こういう力が出てくるのだろうか、という疑問が出て来ました。そこで、更に文化に関して創立者はどのように言っているのかと思って、いろいろ調べてみたら、次のような内容のものがありません。「諸民族の文化は」、まあ日本の文化でもいいですが、諸民族の文化は「その諸民族の魂が、宇宙生命の慈悲や智慧の躍動から聞き取った、内なる声を表現して、昇華したものだ」と。非常に文学的でもあるし、哲学的でもあるなと思います。「内なる声」とはある意味ではメッセージです。宇宙生命の慈悲とか智慧はどのようなメッセージを出しているのか。そのメッセージを受け取り、そしてそれを表現して、昇華したらその民族の文化の根底になることができるのだ、ということだと思います。

そこでまた少し深入りして、そうすると次はその慈悲のメッセージとは何か、その智慧のメッセージは何かを知りたいところです。そう思っているいろいろ探していたらありました。「慈悲からの3つのメッセージ」という内容です。これはネパールのトリブバン大学の講演の中にありました。創立者は慈悲からの3つのメッセージということで、次のように紹介していました。ここから生きる力とか、徳の力を感じていきましょう。

1番目は「慈悲は人類の宇宙的使命である」です。具体的内容は何かということ、万物を育み、繁栄と幸福に導く慈悲の行為は、宇宙より人類が託された使命であるということです。すごいですね。万物を育む、繁栄・幸福に導く慈悲。これは人類に託された使命であると。多くの人がこのように思うようになると、戦争という手段は出てこないと思います。創立者は続けて、そして人間はその自覚をもって、それを達成するなかで生きる意味を感じると言っています。これは確かに「生きる力」につながるなと思いました。

2番目は「ヒマラヤのごとく悠然と」です。悠然とした境涯、これは「徳の力」につながると思います。それから3番目は「自他共の幸福の為の行動」です。「自他共の幸福の為の行動」は、これは徳の力につながっていくと思います。確かにこのようなメッセージを聞いたなら、「生きる力」



も「徳の力」も十分に感じる事が出来ると思います。

次は智慧のメッセージですが、宇宙からのメッセージといった表現はなかったので、ここからは仮説です。種々の智慧があるので、ここでは午前中の人間主義のところで「縁起」が出てきたので、縁起の智慧と関連付けたら「生きる力」とか「徳の力」に結びつけられるのではないかなと思って縁起の智慧を借ります。

縁起の智慧と聞いたら、九識論を想起しておりました。一番下は阿摩羅識です。一番下といっても根底の次元です。阿摩羅識の上に、阿頼耶識があります。その阿頼耶識縁起のところから少しヒントをもらいました。阿頼耶識には大円鏡智というのがあります。どういう智慧かと言うと、自分自身の尊厳性を知って、自分を築き上げてくれた宇宙全体のすべてに対する深い感謝と報恩の決意に至る、これを大円鏡智と言います。確かに縁起を感じます。自分が今ここに存在しているのは、自分だけで成り立っているのではなく、いろんな人との関わりの中で、今の自分があるという自覚に立つと、確かに縁起を感じます。またそれを通して、自分の尊厳性も知ることができます。大円鏡智の智慧を得ると、その次はこのようになると言っています。即ち、自他共に平等で尊厳を有する存在であることを自覚する、こういう段階に導いてくれると。これを平等性智と言います。そしてこの平等性智は、次にかげがえのない個性を正しく見ることに導いてくれる。これを妙観察智と言います。そして、この妙観察智は、次に同苦・抜苦・与楽の行動に導いてくれる。これを成所作智と言います。同苦・抜苦・与楽というのは、慈悲の事です。

この一連の智慧の出発点は、自分自身の尊厳性を知り、自分を築き上げてくれた宇宙全体への深い感謝・報恩です。そういう智慧が湧いてくれば、最終的にはこの同苦・抜苦・与楽の行動にまで至ることができるわけです。これを阿頼耶識縁起と言います。抜苦・与楽の行動や、それから、周囲が自他共に平等で尊厳を有する存在というように見れるとか、宇宙全体に対する深い感謝・報恩とか、これらをトータルすると、やはり「生きる力」とか「徳の力」とかを感じられるのではないかなと思います。従って創立者の文化主義というのは、今日も冒頭に言いましたが、これは仏法の思想なのだと思います。そして、仏法の言葉を使わないで表現されているのだと、今しみじみ感じています。

次は北京大90年の講演にあった文化交流のところですが、創立者は、文化交流は、それを通して人間の精神に永遠性とか普遍性を与えてくれると言っています。従って民衆交流をするときに、文化が非常に大きな役割を果たすことを強調しています。それでは、どうしてそういうことが言えるのだろうかと思って、いろいろ調べてみたら、こういうのがありました。文化というのは、「人間誰しもが有する生命の無限の潜在的可能性を具体化したものである」と言っています。これも非常に深い、広い捉え方です。「人間誰でも持っている。無限の潜在的な可能性」、そのように考えたら、これは誰でも持っているので、普遍性というのをそこに見出すことができると思います。創立者はよくアメリカの詩人のロングフェローの言葉「音楽は人間普遍の言語である」を使って説明しています。確かに音楽は、言葉の意味がわからなくても、本当にこのように感じられます。

ここに私は文化主義の1番目「人間生命の具体的開花」とか、それから午前中から言っている

人間主義の②「人間生命の価値創造」といったものが関連してくるのではないかなと思いました。以上が、文化主義です。

ここからが教育主義です。教育主義は、価値論も存在論も、同じくらい強調されていると思っています。1番目は「人間教育」、2番目は「自他共の幸福についての教育」、3番目は「人間革命教育」、4番目は「世界市民教育」、5番目は「感恩・報恩教育」、6番目は「環境共生教育」です。以上は仮説です。

最初は北京大学90年の講演です。創立者は次のように言っています。教育とは何か。教育とは、人間の内なる無限の可能性を開き鍛えて、そのエネルギーを価値の創造へ導き、そしてそれにとどまらないで、社会を築き、時代を決する根源の力であると。範囲が非常に広いです。学校教育とか、家庭教育とか、それだけにとどまっていません。社会全体を、時代を築くとまで言っています。

この教育の内容は、この社会構築のプロセスを想像してもらえば、これたしかに人間革命だということがおわかりになると思います。だからこの内容は、先ほどの3番目の「人間革命教育」と、それから今日、午前中に紹介した人間主義と関連すると思います。「人間の内なる無限の可能性を開き鍛え」は人間主義の②「人間生命の価値創造」というように言っていると思います。また「そのエネルギーを価値の創造へと導いて、社会を築き時代を決する」は、人間主義の③「人間と人間、人間と社会、人間と自然との間に新しい価値の創造をしていく」に関連すると思います。

次に、この講演の中で創立者が、中国の教育思想の中で、特に次の2点に対して注目しています。1点目は「常に人間が機軸になっていたこと」、2点目は、「経世済民という強い倫理性が備わっていたこと」です。この1点目の常に人間が機軸というのは、午前中にすでにお話しをしました「神のいない文明」、また論語の「怪力乱心を語らず」を根拠にして、常に人間が機軸になっていたと言っています。これは「人間という原点に立脚する」ということなので、人間主義の①「生命の絶対的尊厳に立脚」と関連すると思います。

次に2番目です。この「経世済民」の倫理性が重要です。その内容は、どのような倫理性なのか。それは、まず人間の内面的陶冶が第一義ではあるけれども、それにとどまらないで、すぐさま経世済民の実践に転じるということです。「経世済民」というのは、世をおさめ、民をすくう、というように読みます。

皆様は、あの「経済」という言葉をご存じだと思います。あの経済というものは、ここからきています。即ち経世済民の1字目と、3字目を合わせて、経済という言葉が出来ました。これは、明治になって日本がエコノミーをどのように訳そうかとなった時に、さすが日本人、中国の熟語や故事成語とかいっぱい知識ありましたから、何か合うものがないかと探し、それで「経世済民」から経済という訳語を作ったのです。でも今少し考えてみたら、今の経済は、本当に世をおさめて民をすくっているのかと思わざるを得ません。

この「人間の内面的陶冶が第一義」というのは、今日、午前中の香港中文大学の講演で出た表

現を使うと、「汝自身の自覚に立った自己規律・自己修養」という言葉に置き換えてもいいのかなと思っています。それからこの内面的陶冶というのは、人間主義の②「人間生命の価値創造」に関連すると思います。また「経世済民」の経世と済民の2つの部分は、人間主義の③「人間と人間、人間と社会・自然との間の価値創造」に関連するのではないかなと思っています。

このように考えてみると、中国の教育思想は、人間主義の①②③を根拠とした教育思想であるといえるのではないかなと思います。従って創立者はここで、中国の伝統的な教育思想は、人間主義を根拠とした教育思想ではなかったらどうかと主張しています。それからもう1つ言えることは、創立者はこのような講演を通して、ご自身の人間教育思想というのはこういうものだというのを紹介されている、このように考えたほうがいいのではないらどうかと思っています。

創立者はいつも、あることを主張される時には、その根拠を提示します。では、根拠はどこにあったのでしょうか。それは『大学』という書物です。『大学』というのは儒教の重要な書物の1つで、政治哲学と学問を直結した内容になっています。特にこの『大学』の中の、次の17文字を創立者は根拠としてあげています。

まず「人間の内面的陶冶」という部分は、それはこの言葉に表されています。即ち「格物・致知・誠意・正心」です。これに続くのが「経世済民」の部分です。それは「修身・齐家・治国・平天下」です。これら前半と後半を合わせれば17文字になります。ここに、内面的陶冶が第一義だが、それにとどまらないで経世済民の實踐に転ずる、それがここに表れていると言っています。

それでは次はこの17文字は、どんな意味かということになります。わかりづらいのは最初の2つだと思います。「格物」というのは、事物の原理を極めるということです。事物の原理を極めることができたなら、「致知」、即ち知識を極めるという意味で、知識を極めることができる。知識を極めることができたなら、意を誠にすることができる。意を誠にすることができたなら、心を正しくすることができる。これらは内面的陶冶に関係していると思います。以上は前半です。

次は後半です。心を正しくすることができたなら、身を修めることができる。身を修めることができたなら、家を整えることができる。家を整えることができたなら、国を治めることができる。国を治めることができたなら、天下を平らかに、即ち平和にすることができる、という内容です。創立者が示した根拠はこれです。

今、この「格物」から「平天下」まで紹介しましたが、このプロセス、この発想、この考え方は、よく考えてみたら、人間革命思想と非常によく似ているなと思いました。即ち「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらには全人類の宿命の転換をも可能にする」と。これとまったく同じ発想なのです。従ってこの内容は、「人間革命教育」に関連するなと思いました。今、紹介した『大学』のこの17文字は、中国の学者はよく知っています。従って人間革命思想、この発想を聞いても、まったく違和感はありません。こういったところから同じ文化圏の中に、日本も中国もあるなと思います。やはり相互理解が早いです。

次は恩です。これは北京大学90年の講演で触れられています。「恩」というこの言葉の響き、また漢字からのイメージでいうと少々古い感じがします。しかし創立者の捉え方はまったくそう

ではありません。創立者は次のように言っています。恩とは「人間と社会の営みを相互に支えて育む精神性の発露で、人間性の精髓だ」と。人間性の最も大事なところだと言っています。またその恩というのは、本質的には授ける側よりも受ける側の心の問題だと言っています。

このことを説明する為に創立者は、魯迅の『藤野先生』という作品を紹介しています。魯迅は日本に留学していました。仙台の医学専門学校で、藤野先生に本当にお世話になりました。魯迅はそれを一生忘れず、またその藤野先生にもらった写真をずっと大事に持っていました。私も魯迅博物館に行って実物を見ました。創立者はさらに「恩を感じて恩を報ずるということは、これはまさしく人間の王道である」と言っています。恩を非常に高く評価をしています。

この講演では、この感恩・報恩を日中関係の中で捉えるということが前提で取り上げられています。文化の恩人である中国の発展・幸福のために、誠心誠意、努力を傾けていく。これが、これからの日本に求められると思います。従って、感恩教育の必要性は十分にあると思います。

このあと感恩と報恩というのは価値創造につながるという話をします。教育主義の中の5番目に「感恩・報恩教育」を提示しましたが、これと関連すると思います。それから更に人間主義の②「人間生命の価値創造」、③「人間と人間、人間と社会・自然との間の価値創造」にも大いに関連すると思います。今から、感恩・報恩というのは価値創造につながるということを説明したら、たしかにそうだな、人間主義の②③に関連すると感じていただけるのではないかと思います。

創立者が松下幸之助氏と対談した内容を紹介します。『新・人間革命』に出ています。即ち「猫に小判というが、猫にとっては小判はまったく価値はない」、確かにそうです。しかし人間に置き換えて考えると、恩を知るということは、その瞬間に、その反対で、「鉄をもらっても金をもらったほどの価値を感じる」、これが恩を知るということ、恩を感じるということだと言っています。

非常に示唆的な内容ですね。つまり、恩を知るということは、鉄を金に変える、そういう力があると捉えています。先ほど言いました受ける側の心の問題なのです。そして「恩を感じた人は、今度は、金にふさわしいものを返そうと考える。みんながそのように考えれば、世の中は物心ともに非常に豊かなものになっていく」と言っています。これは『新・人間革命』22巻の「新世紀」のところに書いてありました。

恩を感じる。恩を報ずる。そうするとどうなるのか。世の中は、物も心も非常に豊かになっていく。これは価値創造です。人間と人間、人間と社会、自然も含めてです。創価の教育が目指すのは価値創造ですから、価値創造に繋がる感恩・報恩を教育に含めていいと思います。

先ほど話した魯迅と藤野先生の関係について、創立者は第2回「特別文化講座」で、こう述べています。即ち「匠師とは、自分が一番つらいときに支えとなり、正しき道へ導く存在である。それが魯迅にとっては藤野先生であった。師弟に生きる人は、無限の勇気が湧く」と。この無限の勇気が湧くという部分が、価値、新しい価値の創造だと思います。

そしてこの講演の最後に、教育交流は民衆交流において、人と人のうちに平等性、共感の絆を育むことが出来ると言っています。それでは次は教育交流が、どうして平等性とか共感とかにつ

ながるのかということになります。創立者が考えているのは、人間教育の交流です。創立者が言っている人間教育は、その出発点は、どんな人間も、等しく無限の可能性を秘めているということです。従って無限の可能性を秘めているという意味では、みんな平等です。そこに思いが至れば共感が生まれてくるということだと思います。この内容は、人間主義の③「人間と人間、社会・自然との間の価値創造」と関連するなと思いました。

次はマカオ大の講演です。これは世界市民意識をどのようにして高めるかという内容になります。私たちは、日常的には民族意識から強い影響を受けているので、それを教育とか哲学とか宗教等を通して、人類意識にまで高めないといけないと、創立者は主張しています。この講演では儒教の五常「仁・義・礼・智・信」を通して、人類意識をこのように高めていったらどうでしょう、という提案だと思います。「仁」を通して、最終的には人類愛まで、「義」を通して人類益、人類主権にまで、「礼」を通して異なる文化を理解し尊重するところまで、ここまで高め鍛え上げていきたいと思います。

「智」というのは、地球的問題群に、みんなが智慧を出して対抗できる、ここまで高めていきたいと思います。「信」というのは、この誠実さでもって不信を信に、反目を理解へ、憎悪を慈愛へ転換していきたいと思います。これは1つの試みです。今後はそれぞれの国で教育とか哲学とか宗教等を通して、人類意識を高め鍛え上げて、世界市民意識を高めていくことの重要性を強調しています。

はい、ちょうど時間になりましたので、本日の講座はここまでにしましょう。ご清聴ありがとうございました。